

3-① われわれ大人にできること

■対象：乳幼児～中学生をもつ親 ■時間：90分程度 ■手法：シミュレーション・ラベルワーク

学習のねらい いじめの問題を解決する上で、大人の役割が重要であることを知る。そして、いじめを予防するために自分自身ができることを考える。

準備するもの ワークシート 模造紙 マーカー 付箋 時計（ストップウォッチ）
※中心のワークの前半はイスのみ（扇形）・後半は机が必要

時間	学習の流れ	留意点	準備
	<p>【はじめに】</p> <p>最近、子どもにかかわる様々な問題が起きています。今日は、その中から「いじめ」を取り上げます。 “いじめは子どもの問題”と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、本当にそうでしょうか。私たち大人にできることはないのでしょうか。今日はそのあたりをみなさんといっしょに考えたいと思います。</p>		
15分	<p>【アイスブレイク】</p> <p>①幸せジャンケン（親学プログラム P97） ②バースデーチェーン（親学プログラム P100） ※バースデーチェーンの順に扇形の隊形でイスに座る ※座った順に【中心のワーク】のグループ（4名程度）をつくり、簡単な自己紹介をする</p>	<p>・①は「たくさんの参加者と知り合う」「心が通じ合う（あいこになる）と気持ちが良いことを知る」をねらいとして実施する。 ・②は【中心のワーク】の隊形・グループをつくるために実施する。</p>	扇形に並べたイス
65分	<p style="text-align: center;">《講座の前にルールとマナーを確認しましょう》</p> <p>【中心のワーク】</p> <p>①いじめの疑似体験（全体） ・ファシリテーターと1～2名の参加者が“いじめめる役”、別の1名の参加者が“いじめられる役”、残りの参加者は“傍観者役”の役割を演技する ・役割演技をした参加者の感想を聞く</p> <p>②いじめの疑似体験（グループ） ・2班でひとつのグループをつくり、“いじめめる役”“いじめられる役”“傍観者役”の役割を交代して行う</p> <p>③新聞記事を読む ④大人に何ができるのかを話し合う ・各班代表もしくはファシリテーターが話し合いの様子を全体に伝える ⑤自分に何ができるのかを考える</p>	<p>・①および②の疑似体験では、特に“いじめられる役”の役割演技を無理強いしない。 ・①では、状況によってはファシリテーターおよび主催者が“いじめめる役”“いじめられる役”の役割演技を行う。 ・“いじめめる役”“いじめられる役”を子ども、“傍観者役”を大人に見立てる。 ・疑似体験が終わったら演技者にねぎらいの言葉を一声かける。 ・話し合いでは、いじめや差別の現場に直面したとき、何もできない場合もあることを認めつつ、それでも何かできることはないかを考えるよう促す。 ※【中心のワーク】は幸田英二氏（人権ワークショップ研究会代表）の『いじめと差別は同じもの!?!』『ストップ・ザ・イジメ』を参考に作成</p>	ワークシート 机・模造紙・マーカー・付箋
8分	<p>【ふり返りと分かち合い】</p> <p>①自分にできることをグループの中で紹介する ②気づきを広める</p>	<p>・全体に広めたい気づきを把握して、発表かコメントにつなげる。</p>	
2分	<p>【おわりに】</p> <p>いかがでしたか。あさのあつこさんのお話の最後に「子どもたちを守るのは、私たち大人しかいない」とありました。このことを肝に銘じて、この地域の子どもたちを守るために、まずはできることから、みんなで取り組んでいきたいですね。</p> <p style="text-align: center;">《講座の最後にルールとマナーを確認しましょう》</p>		

3-①「われわれ大人にできること」

① いじめの疑似体験（全体）（15分）



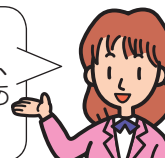
「いじめの問題を解決するために大人ができること」を考える前に、いじめがどのようなものを疑似体験してみたいと思います。どなたかお一人「いじめられる側」の役割をしてくださる方はいらっしゃいませんか。（いじめられる役の方に前に座ってもらう）最初は、私が「いじめる側」になって始めたいと思います。

	演技者	演技内容	ファシリテーターの声かけ	予想される参加者の声
1	A いじめる役（ファシリテーター） B いじめられる役（1名）	AがBの前に立つ	「いじめは、ある一定の人間関係のある者による行為です。」 「Bさん、どんな気持ちですか。」	「前に立たれると、少し嫌な気持ちになります。」
2	A いじめる役（ファシリテーター） B いじめられる役（1名）	AがBに対して斜にかまえる	「例えばこれは心理的ないじめです。」 「Bさん、どんな気持ちですか。」	「にらまれると、やはり嫌な気持ちです。」
3	A いじめる役（ファシリテーター） B いじめられる役（1名）	AはBに向けて指さす	「そして、これは物理的ないじめの行為です。」 「Bさん、どんな気持ちですか。」	「すごく嫌な気持ちです。」
4	A いじめる役（2名） B いじめられる役（1名）	(Aの人数を増やす)	「いじめは集団で行われる場合もあります。」 「Bさん、どんな気持ちですか。」	「1人よりも複数で指さされた方がつらいです。」
5	A いじめる役（2名） B いじめられる役（1名） C 傍観者役（残り全員） C 無関心者役（残り全員）	Cがその場で立ち、黙ってA・Bを見る その後、後ろ向きに立つ	「みなさん、その場でご起立ください。」 「Bさん、どんな気持ちですか。」 「次に後ろ向きになってください。」 「Bさん、どんな気持ちですか。」 「さらに嫌な気持ちになったそうですが、先ほど立たれた方は何かしましたか。」 (C役の誰かに聞く)	「圧迫感があって、さらに嫌な気持ちになりました。」 「なぜ助けてくれないのかと孤独な気持ちになりました。」 「いいえ。何もしていません。」 「かわいそうだと思って見ていました。」
「このように傍観や無関心がいじめられている者をさらに追い詰めてしまうことがあります。」 「私たち大人(C)と子どもたち(A・B)の関係がこのようになっていないでしょうか。」 「かわいそうと思っているだけでは救えないどころか、逆に傷つけてしまうことになるかもしれません。」				
6	A いじめる役（2名） B いじめられる役（1名） C 支援者役（残り全員）	CがBの横や後ろに移動する	「みなさん、Bさんの横に寄り添って座ったり、後ろに立ってみたりしてください。」 「Bさん、どんな気持ちですか。」 「Aさんたちはどんな気持ちですか。」	「少し安心感が出てきました。」 「指をおろしたくなりました。」

※5と6が最も大切にしたい役割演技。子どもの世界で起きているいじめを“大人の問題”として考えるきっかけとしたい。

② いじめの疑似体験（グループ）（10分）

それではみなさんも体験してみましょ。1班と2班、3班と4班…という具合に2班で1つのグループ（8～10人）を作ってください。グループの中でどなたからでも結構ですので、いじめる役・いじめられる役・周りの大人役になって役割演技をしてみましょ。強制ではありませんので「やりたくない」と思われた方は無理をなさらないでください。



③ 新聞記事を読む（5分）



（ワークシートを配る）これは大津のいじめ自殺事件を受けて書かれたインタビュー記事です。私が読んでみますので聞いてください。

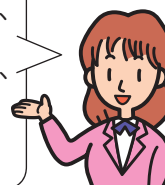
④ 大人に何ができるのかを話し合う（30分）

記事の最後の段落に「真剣に受け止めて何かできるのか」とありました。疑似体験して感じたことや、新聞記事を読んで気づいたことなどを参考に、親として、そして大人として、われわれにできることを考えてみましょう。

まず5分程度時間をとりますので、各自で付箋に思いついたことをできるだけたくさん、自由な発想で書いてください。

（付箋が書けたら）付箋の内容を班のメンバーに紹介しながら、模造紙に貼ってください。

（付箋が貼れたら）同じものや似たものを近くにまとめて、見出しをつけてみましょう。



※各班代表もしくはファシリテーターが話し合いの様子を全体に伝える。

⑤ 自分に何ができるのかを考える（5分）



いじめ問題に対して、自分自身にできることはあったでしょうか。話し合いの中で出てきたことの中から「これはやる・できる」というものを選んで、ワークシートに書いてみましょう。（書けたら）班のメンバーに書いたことを紹介（宣言）してみましょ。

3-①「われわれ大人にできること」ワークシート

われわれ大人にできること

◆大人が変わろう 作家 あさのあつこさん

大人たち、もっとしっかりしよう。今、一番しっかりしないといけないのは私たちだ。親、学校、教育委員会、PTAだけでなく、子どもにかかわるあらゆる大人が子どもを守るという原点に戻らないといけない。なんでこんな事件が再び起こったのか。過去にも同じことがあったのに、なぜ大人は変わらないのか。

いじめは子どもたちの問題と思われがちだが、実はそうではない。大人の問題だ。子どもが変えられるところは自分とその周辺に限られるが、大人はもっと大きなところを変えることができる。

同年代の子どもが集まると、問題やぶつかり合いが起きる。これは時代なんて関係なく、ずっとあったこと。でも、生きる手だてや希望を与えたのは大人たち。自分たちには関係ないことでも、子どもを変えれば何とかなる問題でもない。もう人ごとではない。いろんな立場の大人がかかわることが必要だ。

大人が、子どもの命を守る姿勢、言葉、態度を本気で見せること。これが子どもたちの希望になる。自殺を止める力になるし、いじめている子を減らす力になる。

いじめている子は、自分たちがやっていることはばれない、罰せられないと、世の中をなめている部分があるが、大人はいじめを許さない、そして、いじめられている子を守ってくれると、子どもたちが信じることができれば、解決できる問題はたくさんある。

今、子どもたちの精神の土台がぐらついている。それがいじめを生み、いじめによって死を選ぶことにつながっている。子どもが大人を信じることができれば、子どもは安定する。

いじめの問題は、大人の、社会の在り方を突き付けていると思う。大人がそのことを本当に感じ取れるのか、真剣に受け止めて何かできるのか。亡くなった子に報いるために、二度と同じことが起こらないようにするしかない。子どもたちを守るのは、私たち大人しかない。

「いじめと向き合うー私が伝えたいこと」(2012年7月26日 共同通信)

<http://www.47news.jp/47topics/e/232599.php> (2014/7/24 アクセス)

※本記事は一般社団法人共同通信社およびあさのあつこ氏の許諾を得て使用しています。

◆自分に何ができるのかを考えてみましょう。

